

三代集の「詞書」の語彙について

若林俊英

一

本稿は、三代集の詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、その基幹語彙を中心に、いささか考察を加えたものである。

語彙の調査をする場合に問題になる単位語の取り方については、宮島達夫氏が『古典対照語い表』（以下、『語い表』と略称する）¹で示された規定をおおむね使用させて頂いた。また、語数調査に関しては、滝沢貞夫氏編『古今和歌集総索引』（明治書院刊）、大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』、片桐洋一氏編『拾遺和歌集の研究 索引篇』（大学堂書店刊）の学恩に浴した。²なお、以下、語彙数に関して、特に注記しない場合は、異なり語数とする。

二

「古今和歌集」「後撰和歌集」「拾遺和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」と略称する）に使用された自立語語彙は、異なり語数で、それぞれ八九二語、一二七六語、一二八六語となる。また、延べ語数では、それぞれ三九七三語、七〇〇二語、五二〇二語となる。³

前述の各作品に使用された語のうち、共通する異なり語を一語としてまとめたものが三代集の「詞書」（以下、「三代

表 (1)

語 種	和 語	漢 語	混種語
語 数	139	16	0
比 率	89.7	10.3	0

表 (2)

品 詞	名 詞	動 詞	形容詞	形 動	副 詞	連体詞	接統詞	感動詞
語 数	91	51	5	0	4	4	0	0
比 率	58.7	32.9	3.2	0	2.6	2.6	0	0

集詞書」と略称する)の語彙となるが、それは、異なり語数で二三四語、延べ語数で一六一七七語である。

三一(1)

次に、「三代集詞書」における基幹語彙についてふれる。

ある作品(群)において、どの程度の使用度数をもつ語を基幹語とするかについては、様々な考え方があろうが、ここでは、延べ語数の一パーミル以上の使用度数をもつ語を基幹語と考えることにする。

「三代集詞書」における全延べ語数一六一七七語の一パーミル(一六)以上の度数をもつ語は、異なり語数で一五五語、延べ語数で一〇四一七語となることがわかった。

なお、資料として「三代集詞書」の基幹語彙を頻度順に示したので参照願いたい。

(2)

資料として後に記載した「三代集詞書」の基幹語彙について、語種別、品詞別に分類したものが、表(1)・表(2)である。

まず、表(1)に関していささかふれる。

『語い表』付載の語種別統計表によると、異なり語数において和語の比率が最も高い作品は「古今和歌集」の九九・七パーセント。以下、「万葉集」「後撰和歌集」の九九・六パーセント、「土佐日記」の九四・一パーセント、「伊勢物語」の九三・七パーセントと続く。また、「三代集詞書」の基幹語彙における和語の比率八九・七パーセントに比較的近い作品としては、「竹取物語」(九一・七パーセント)、「蜻蛉日記」(九一・一パーセント)、「更級日記」(九〇・七パーセント)、「源氏物語」(八七・〇パーセント)がある。

以上の点から考えると、「三代集詞書」の基幹語彙は、語種別比率でみる限りは、平安時代の和文系作品と大差ないと言えそうである。一方、「三代集詞書」の全異なり語における比率でみると、和語は八一・八パーセントであり、平安時代の和文系作品とは相当大きな差があると言わざるを得ない。

次に、表(2)に関してふれる。

宮島氏の『語い表』には、品詞別統計表も付載されているので、それを利用して頂いたが、それによると、「三代集詞書」の基幹語彙における名詞の比率五八・七パーセントに比較的近い作品としては、「万葉集」(五九・七パーセント)、「伊勢物語」(五四・六パーセント)、「古今和歌集」(五五・一パーセント)、「土佐日記」(五五・〇パーセント)、「後撰和歌集」(五三・三パーセント)、「枕草子」(五三・五パーセント)、「大鏡」(六三・九パーセント)、「方丈記」(五七・五パーセント)、「徒然草」(五九・一パーセント)をあげることができる。ここで特徴的なことは、「三代集詞書」の基幹語彙における名詞の比率が、和歌及び和歌的要素の強い作品(「伊勢物語」・「土佐日記」)におけるそれと比較的近く、「源氏物語」等の所謂平安時代の代表的和文系作品群とは趣を異にしている(「枕草子」は例外的に近似)ということである。ただし、語種別比率の場合と同様に、「三代集詞書」の全異なり語における名詞の比率(六八・七パーセント)でみると、一四作品のどれとも相当大きな差がある。

表 (3)

段階	共通 語数	「平安和文基本語彙」での段階								非共 通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	3			1		1		1		1
2	4	1			1	2				
3	7	1	2				2	1	1	
4	14	2	2	2	4	2		1	1	1
5	28	2	4		2	13	3	3	1	4
6	46		1	7	9	7	10	7	5	6
7	28			2	3	2	5	12	4	13
計	130	6	9	12	19	27	20	25	12	25

四

表(3)において示したのは、「三代集詞書」の基幹語彙を中心とした「平安時代和文脈系文学の基本語彙」³⁾(以下、「平安和文基本語彙」と略称する)との所属段階別共通語・非共通語数である。この表を成すに当たっての段階分けは、西田直敏氏が「平家物語」の語彙でなされたのとおおむね同様な方法によって行った。

以下、表(3)をもとにしていささか考察を試みるにあたり、両者の差が上・下各一段階までのものは許容範囲とし、考察の対象とはせず、二段階以上の差がある語を、「詞書」における特徴的な使用例ととらえ、その対象とした。

「三代集詞書」での所属段階の方が上位のものとしては、

しる(知・領)、よむ(詠・読)、つかはす(遣)、とき(時)、
をんな(女)、もと(元・本・下)、うた(歌)、いへ(家)、
かへし(返)、まかる(罷)、びやうぶ(屏風)、あそん(朝
臣)、ある(或)、さくら(桜)、かへりごと(返言)、あ
した(朝)、が(賀)、かた(形)、め(妻・女)、なくな
る(無)、おこす(遣)

の二一語をあげることができるが、ここには一瞥して「詞書」に頻用されて当然と思われるものが多数所属していることがわかる。また、この二一語のうち、「しる」「とき」「もと」の三語を除く一八語が、宮島達夫氏が示された一四作品共通語ではないが、この点は、「平安和文基本語彙」での所属段階の方が上位の語群における三五語中二五語が一四作品共通語であることから考えると、注目に値するものであると言えよう。すなわち、「三代集詞書」での所属段階の方が上位の語群には、その使用に多少の偏りが見うけられるということである。換言すれば、それらは「詞書」に使用されやすい語群であると言える。それに対して、「平安和文基本語彙」の方が上位の語群は、当然のことではあるが、日本語の基層語とでも言うべきものが多い。

次に、共通しない語群についていささかふれることにする。

ここに属するのは、表(3)でわかるように二五語であるが、以下、具体的に示す。

だい(題)、うたあはせ(歌台)、あひしる(相知)、まうでく(詣来)、えんぎ(延喜、年号)、いひつかはす(言遣)、おくる(送・贈)、くわんびやう(寛平、年号)、かきつく(書付)、てんりやく(天曆、年号)、ほとり(辺)、ふぢはら(藤原、人名)、これさだ(人名)、さだいじん(左大臣)、はじめて(始)、みなもと(源)、あづま(東)、までく(詣来)、やまと(大和、地名)、あひだ(間)、うだいじん(右大臣)、これかれ(此彼)、さけ(酒)、ていじ(亭子)、やどる(宿)

これらのうちの多くは「三代集詞書」での所属段階の方が上位のものと同様、「詞書」に頻用されて然るべきものであると言える。

ところで、「三代集詞書」の基幹語彙一五五語は、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の三作品共に使用されたもの、二作品に共通するもの、一作品のみに使用されているものの三種に分類することができる。すなわち、三作品共通語は

一四三語、二作品共通語は九語、一作品のみに使用されたもの三語となるが、「平安和文基本語彙」と共通しない「三代集詞書」の基幹語彙には、上記二作品共通語が六語、共通しないものが二語含まれている点には注意しなければならぬであろう。以下、具体的に示すと、二作品共通語は、「えんぎ」「くわんびやう」「これきだ」「さだいじん」「うだいじん」「これかれ」、共通しないものは、「てんりやく」「までく」ということになる。この語群で特徴的なことは、年号・人名・官職が多いということであろうが、これらの語は、いずれも、「詞書」の記述内容との相関性が非常に高いものである。

以上から考えると、この「平安和文基本語彙」と共通しない「三代集詞書」の基幹語彙は、「詞書」に、より特徴的に使用された語群であると同時に、各「詞書」間の記述内容差を端的に示す語群であるとも言えそうである。

五

次に、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の三作品に関して、その使用語彙の相関関係について、いささか考えるが、その対象とするのは、各「詞書」の基幹語彙のうち共通して使用されている以下の七八語である。

つかはす(遣)、よむ(詠)、だい(題)、しる(知・領)、ひと(人)、とき(時)、をんな(女)、もと(元・本・下)、まかる(罷)、いふ(言)、す(為)、かへし(返)、うた(歌)、いへ(家)、みる(見)、あり(有)、ところ(所)、をとこ(男)、はべり(侍)、はな(花)、みこ(親王)、もの(物・者)、こと(事)、きく(聞)、うたあはせ(歌合)、なる(成)、ひ(日)、あそん(朝臣)、また(又)、ひさし(久)、とし(年)、のち(後)、くに(国)、この(此)、あふ(合・逢)、たてまつる(奉、四段)、みや(宮)、ある(或)、かへる(帰)、まうでく(詣来)、ふみ(文)、かへりこと(返言)、さくら(桜)、かく(書)、とふ(訪・問)、おもふ(思)、つき(月)、

なし(無)、あした(朝)、あき(秋)、かの(彼)、はる(春)、ふる(降)、みち(道)、おなじ(同)、むすめ(娘)、うち(内・内裏)、すむ(住)、をる(折)、やま(山)、かみ(上・守)、もみち(紅葉)、ゐん(院)、え(副詞)、みかど(御門)、きやう(京)、まうす(申)、ほとり(辺)、まへ(前)、おもしろし(面白)、あめ(雨)、はは(母)、まうづ(詣)、さぶらふ(候・侍)、おこす(遣)、なぬか(七日)

以上の七六語についての順位相関係数を、スピアマンの計算式により計算したところ、「古今詞書」と「後撰詞書」との間が〇・四三三、「後撰詞書」と「拾遺詞書」との間が〇・六〇五、「古今詞書」と「拾遺詞書」との間が〇・六〇〇となった。これによると、「古今詞書」と「後撰詞書」との間には強い相関は認められない。しかし、「拾遺詞書」が関係する相関係数は、いずれも〇・六と、かなり強い相関が認められる。また、一致係数は、〇・六九七であり、総体としては、強い一致関係にあると言える。

以上、順位相関と一致係数をみてきたが、まとめると以下の点が指摘できる。

I 「古今詞書」と「拾遺詞書」、「後撰詞書」と「拾遺詞書」とにはかなり強い相関が認められる。

II 一致係数からすると、三つの「詞書」は、総体的に強い一致関係にあると言えるが、これは「拾遺詞書」の語彙に依るところが大であろう。

六

人物を表現する方法としては、具体的に人名や官位・官職などによる示し方と、より抽象的な「ひと」のような語による示し方が考えられる。ここでは、後者の代表的な語である「ひと」「をんな」「をどこ」を使用し、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」と「伊勢物語」との関係について、使用率と使用度数・期待値の観点からいささかふれる。

表 (4)

	古今詞	後撰詞	拾遺詞	竹 取	伊 勢	土 佐	紫式部	更 級	方 丈
ひ と	2.94	3.34	1.46	1.83	2.50	2.29	2.16	1.85	1.82
をんな	0.50	3.21	1.50	0.37	1.95	0.23	0.10	0.07	0.00
をとこ	0.20	1.57	0.54	0.00	2.89	0.17	0.06	0.04	0.04

表 (5)

	ひ　　と		を　ん　な		を　と　こ		作品別延 べ　度　数
	使用度数	期待値	使用度数	期待値	使用度数	期待値	
古今詞	117	72	20	9	8	5	3, 973
	1.63		2.22		1.60		
後撰詞	234	126	225	15	110	9	7, 002
	1.86		15.00		12.22		
拾遺詞	76	94	78	11	28	6	5, 202
	0.81		7.09		4.67		
竹　取	94	92	19	11	0	6	5,124
	1.02		1.73		0		
伊　勢	173	125	135	15	200	8	6, 931
	1.38		9.00		25.00		
土　佐	80	63	8	8	6	4	3, 496
	1.27		1.00		1.50		
源　氏	3, 732	3, 750	321	454	65	255	207, 792
	0.995		0.71		0.25		
紫式部	189	158	9	19	5	11	8, 737
	1.20		0.47		0.45		
更　級	134	131	5	16	3	9	7,243
	1.02		0.31		0.33		
方　丈	46	46	0	6	1	3	2, 527
	1.00		0		0.33		
徒　然	573	309	31	37	19	21	17, 112
	1.85		0.84		0.90		
合　計	7, 791		943		529		総合計 431, 694

表(4)は、前記の各「詞書」と、『語い表』所載の作品のうち、異なり語数二五〇〇語未満、延べ語数一〇〇〇〇語未満の作品に使用された「ひと」「をんな」「をそこ」の使用率をまとめたものである。

「ひと」についてみると、「後撰詞書」が三パーセント以上と、非常に高く、「古今詞書」と「伊勢物語」とがそれに続く。一方、「拾遺詞書」においては、『語い表』所載の一四作品の平均使用率一・七七パーセントより低率となっているが、これは、具体的な人物名や官位・官職により人物を示す場合が多いことと関係がありそうである。

前述条件外で「ひと」の使用率が非常に高い作品には、「徒然草」(三・三四パーセント)があるが、この「徒然草」は、段落分けが明確な文章構成になっている点と記述内容により、「ひと」が使用され易いと考えられる。ただし、「をんな」「をそこ」の使用率(それぞれ〇・一八パーセント、〇・一一パーセント)が「伊勢物語」や「古今詞書」ほど高くない点には注意が必要であらう。

次に、「ひと」に多少の具体性を持たせた「をんな」と「をそこ」についてふれる。

「をんな」は、「後撰詞書」が最も高率であり、以下、「伊勢物語」「拾遺詞書」「古今詞書」の順となる。一方、「をそこ」は、その記述内容から「伊勢物語」での使用率が群を抜いて高く、「後撰詞書」「拾遺詞書」「古今詞書」がそれに続く。

「をんな」と「をそこ」を合算した使用率でみると、その使用傾向は、より明確になる。すなわち、「伊勢物語」(四・八四パーセント)、「後撰詞書」(四・七八パーセント)、「拾遺詞書」(二・〇四パーセント)、「古今詞書」(〇・七〇パーセント)の順であり、「伊勢物語」「後撰詞書」と「拾遺詞書」と「古今詞書」との間には、それぞれ大きな差がある。ただし、「ひと」「をんな」「をそこ」の三語の使用率を合算した数値では、「伊勢物語」「後撰詞書」と「拾遺詞書」「古今詞書」とには大きな差があるが、後二作品間には有意と思われる差はない。

次に、三語の使用度数と期待値についてふれるが、その考察をするに当たっては、表(4)においてみた九作品と、異なり語数の多い「源氏物語」「徒然草」とを対象とした。

表(5)は、「ひと」「をんな」「を」との各作品での使用度数と期待値、期待値を一定した時の使用度数の比をまとめたものである。なお、期待値を計算するに当たって使用した各語の合計及び総延べ度数は、『語い表』所載の一四作品における数値に「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」での度数を加えたものである。

この表(5)によると、「徒然草」「土佐日記」「紫式部日記」の「ひと」、「竹取物語」の「をんな」、土佐日記の「を」とのよう、使用度数が期待値より相当大きな作品もあるが、より注目値するものは「伊勢物語」及び「古今詞書」以下の「詞書」での使用実態であろう。すなわち、期待値と使用度数の比が二五・〇の「伊勢物語」における「を」と「をんな」を始めて、比が一〇・〇以上の「後撰詞書」における「をんな」と「を」と「を」と「を」等であるが、これからも「詞書」及び「伊勢物語」における「をんな」、「拾遺詞書」における「をんな」と「を」と「を」等であるが、これからも「詞書」及び「伊勢物語」における三語の使用の特異性がうかがえる。特に、「伊勢物語」と「後撰詞書」における特異性と類似性が指摘できよう。以上、「詞書」を中心として各作品における「ひと」「をんな」「を」との三語の使用実態を、その使用率と使用度数・期待値の面からみてきたが、これらから共通してうかがえることは、「伊勢物語」と「後撰詞書」における類似性、抽象性と簡潔性とを兼ねた三語の「詞書」における使用率の高さということであろう。

七

以上、三代集の「詞書」の語彙について、いささかの考察を試みたが、以下、大要を記すことにより、まとめたい。

1 「三代集詞書」の異なり語数は二三五四語、延べ語数は一六一七七語である。

2 延べ語数の一パーミル以上の度数を持つ語を基幹語とすると、「三代集詞書」のそれは、異なり語数で一五五語、延べ語数で一〇四一七語となる。また、延べ語数一〇四一七語は、全延べ語数の六四・三九パーセントに当たる。

3 「三代集詞書」の基幹語彙における語種別比率は、平安時代の和文系作品のそれと大差はない。一方、基幹語彙における名詞の比率でみると、和歌的要素の強い作品との類似性が比較的高い。ただし、全異なり語彙における比率でみると、「三代集詞書」と『語い表』所載の作品との間には相当な差がある。

4 「三代集詞書」の基幹語彙のうち「平安和文基本語彙」と共通しないものは、「詞書」に頻出する特徴的語群であると言える。

5 「古今詞書」と「拾遺詞書」、「後撰詞書」と「拾遺詞書」とには、それぞれかなり強い相関が認められるが、「古今詞書」と「後撰詞書」との間にはそれが認められない。また、一致係数からすると、三つの「詞書」は、強い一致関係にある。

6 「ひと」「をんな」「をとこ」の三語の使用実態からは、「伊勢物語」と「後撰詞書」との類似性がうかがえる。また、前記三語の使用率の高さは、「詞書」において特徴的でもある。

注

(1) 以下、用例数や統計に関する『語い表』の数値は、宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版 古典対照語い表および使用法』による。

(2) ただし、私意により読み等を改めた箇所がある。

- (3) 拙稿Ⅰ『古今和歌集』詞書の語彙について(『湘南文学』一七号)、Ⅱ『後撰和歌集』の『詞書』の語彙について(『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』所収)、Ⅲ『拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について(『城西大学女子短期大学部紀要』八巻一号)。以下、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」に関しては、それぞれ前掲のものによる。ただし、「古今詞書」「後撰詞書」に関しては、調査対象範囲および読み方の変更による再調査の結果、数値に異動がある。

- (4) 大野晋氏「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」(『国語学』八七集)

- (5) 西田直敏氏著『平家物語の文体論的研究』八四頁。

- (6) 田中章夫氏「語彙研究における順位の扱い」(『国語語彙史の研究』七『所収』)に示されているものによった。

- (7) 本稿に使用した七六語に関して、「三代集詞書」における順位と各「詞書」における順位について、それぞれ順位相関係数を計算したところ、「三代集詞書」と「古今詞書」とが〇・七六八、「三代集詞書」と「後撰詞書」とが〇・八二三、「三代集詞書」と「拾遺詞書」とが〇・八四四と、いずれも強い相関が認められるが、特に「三代集詞書」と「拾遺詞書」との相関係数からしても、この点は言えそうである。

- (8) 期待値Ⅱ語別総使用度数×作品別延べ語数／総延べ語数 によった。

- (9) 拙稿Ⅲ

(一九九〇・一二・二〇)

「三代集詞書」の基幹語彙

順位	単語		古今	後撰	拾遺	合計	順位	単語		古今	後撰	拾遺	合計
一	つかはす	遣	四八	三四四	九六	四八八	一六	あり	有	一六	一〇二	三六	一五四
二	よむ	詠	三三八	二二	九八	四四八	一七	ところ	所	一九	六一	六六	一四六
三	だい	題	一〇三	一四三	一九八	四四四	一八	をとこ	男	八	一一〇	二八	一四六
四	しる	知領	九九	一五〇	一九二	四四一	一九	びやうぶ	屏風	九	一	一三二	一四二
五	ひと	人	一一七	二三四	七六	四二七	二〇	はべり	侍	一三	八一	四四	一三八
六	とき	時	一四七	五九	一五〇	三五六	二一	はな	花	五〇	四二	三八	一三〇
七	をんな	女	二〇	二二五	七八	三三三	二二	みこ	親王	四四	三八	二四	一〇六
八	もと	元本下	二八	一六九	九三	二九〇	二三	もの	物者	一五	六二	二八	一〇五
九	まかる	罷	七七	一三五	六九	二八一	二四	こと	事	九	六九	二五	一〇三
一〇	いふ	言	五七	一五七	五七	二七一	二五	きく	聞	一九	五五	一九	九三
一一	す	為	四二	一〇九	九九	二五〇	二六	うたあはせ	歌合	五一	七	二七	八五
一二	かへし	返	二二	一八九	三三	二四二	二七	なる	成	一八	四二	二二	八一
一三	うた	歌	一三八	一六	五七	二二一	二八	ひ	日	二五	二七	二四	七六
一四	いへ	家	四六	六〇	六九	一七五	二九	あそん	朝臣	一四	四四	一七	七五
一五	みる	見	五三	四七	六二	一六二	三〇	また	又	一四	四二	一五	七一

四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	順位
かへりごと	ふみ	まうでく	ころ	かへる	ある	あひしる	みや	たてまつる	あふ	この	くに	のち	とし	ころ	ひさし	単語
返言	文	詣来	頃	帰	或	相知	宮	奉四段	合逢	此	国	後	年	心	久	
四	五	一三	二	一八	二七	一六	三四	二九	八	三六	二六	一一	一三	六	六	古今
四〇	四二	二六	三一	三二	一三	三七	九	一四	三八	一五	二七	二六	三四	五三	五〇	後撰
八	六	一五	二三	六	一六	三	一四	一四	一三	九	九	二六	一六	四	一一	拾遺
五二	五三	五四	五六	五六	五六	五六	五七	五七	五九	六〇	六二	六三	六三	六三	六七	合計
六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	順位
み	はる	かの	いと	ついで	あき	あした	なし	つき	いひつかはす	おもふ	とふ	かく	えんぎ	しのぶ	さくら	単語
身	春	彼	甚	序	秋	朝	無	月	言遣	思	訪問	書	年号	偲忽	桜	
一八	一六	一五	九	一四	一六	四	一一	一〇	一	一〇	七	一一	〇	〇	二六	古今
一九	一六	二〇	二九	二四	一三	二五	二六	一三	二三	三二	二七	一四	九	三八	一四	後撰
四	九	六	三	四	一四	一五	八	二四	二三	六	一六	二五	四一	一三	一一	拾遺
四一	四一	四一	四一	四二	四三	四四	四五	四七	四七	四八	五〇	五〇	五〇	五一	五一	合計

七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	順位
やま	その	をる	ほど	すむ	てんりやく	うち	むすめ	きさい	おなじ	みち	ふる	かきつく	くわんびやう	が	おくる	単語
山	其	折	程	住	年号	内内裏	娘	后	同	道	降	書付	年号	賀	送贈	
一三	一〇	九	一	一一	〇	四	四	三〇	八	一〇	一一	二	三四	九	一三	古今
七	一九	二〇	二四	一九	〇	一二	一九	六	一九	一六	二〇	二四	六	三	二四	後撰
一三	四	五	一〇	五	三六	二一	一五	二	一一	一三	八	一三	〇	二八	三	拾遺
三三	三三	三四	三五	三五	三六	三七	三八	三八	三八	三九	三九	三九	四〇	四〇	四〇	合計
九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	八五	八四	八三	八二	八一	八〇	七九	順位
なく	おもしろし	ゆき	まへ	まうす	ほとり	きやう	かた	るん	みかど	え	ひとびと	もみち	たつ	かみ	よ	単語
鳴四段	面白	雪	前	申	辺	京	形	院	御門		人人	紅葉	立四段	上守	夜	
一四	七	一五	四	六	一五	一三	六	五	一六	七	六	九	一一	四	一五	古今
三	一三	六	一三	一七	七	一〇	五	一一	九	一七	六	九	一八	七	一七	後撰
一〇	七	七	一一	五	六	五	一八	一四	五	六	一九	一四	三	二一	一	拾遺
二七	二七	二八	二八	二八	二八	二八	二九	三〇	三〇	三〇	三一	三二	三二	三二	三三	合計

一〇	一〇九	一〇八	一〇七	一〇六	一〇五	一〇四	一〇三	一〇二	一〇一	一〇〇	九九	九八	九七	九六	九五	順位
ちる	く	おや	おこす	みゆ	ふぢはら	つく	さぶらふ	かた	まうづ	はは	なか	せうそこ	なくなる	あめ	め	単語
散	来	親	遣	見	人名	付着	候侍	方	詣	母	中仲	消息	無	雨	妻女	
一四	三	四	五	五	一二	一	四	七	七	七	三	一	二	五	二	古今
八	一七	一六	九	一九	六	一三	一二	一四	八	一一	八	二〇	七	一六	一一	後撰
一	三	三	九	〇	六	一〇	八	三	一〇	七	一四	四	一七	五	一四	拾遺
二三	二三	二三	二三	二四	二四	二四	二四	二四	二五	二五	二五	二五	二六	二六	二七	合計
一二六	一二五	一二四	一二三	一二二	一二一	一二〇	一一九	一一八	一二七	一二六	一二五	一二四	一二三	一二二	一二一	順位
をのこ	わたる	はじめて	さだいじん	くだる	きく	かよふ	うま	おはします	ふ	これさだ	き	ゑ	とる	うめ	いま	単語
男	渡	始	左大臣	下	菊	通	馬	在	経	人名	木	絵	取	梅	今	
九	三	二	〇	〇	一〇	三	六	一〇	五	一八	一〇	五	二	一三	二	古今
二	七	一三	一一	三	七	一五	三	八	一四	三	五	一	一一	三	一五	後撰
九	一〇	五	九	一七	三	二	一一	二	二	〇	六	一六	九	六	五	拾遺
二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二一	二一	二一	二二	二二	二二	二二	合計

一四二	一四一	一四〇	一三九	一三八	一三七	一三六	一三五	一三四	一三三	一三二	一三一	一三〇	一二九	一二八	一二七	順位
さいりん	よる	やまと	むかし	までく	ほとときす	なぬか	とほし	つごもり	さく	こころざし	うへ	あづま	あく	みなもと	これ	単語
斎院	夜	地名	昔	詣来	時鳥	七日	遠	晦日	咲	志	上	東	開下二	人名	此	
二	一	六	九	〇	一〇	四	二	六	七	〇	八	七	一	二	九	古今
一	一	一〇	八	一八	二	七	一三	九	六	一八	五	七	一五	六	五	後撰
一四	一六	二	一	〇	六	七	三	三	五	〇	五	四	二	一一	五	拾遺
一七	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一九	一九	合計
			一五五	一五四	一五三	一五二	一五一	一五〇	一四九	一四八	一四七	一四六	一四五	一四四	一四三	順位
			やどる	ていじ	たまふ	さけ	これかれ	かへす	うだいじん	あひだ	やよひ	めす	とぶらふ	とうぐう	たき	単語
			宿	亭子	給	酒	此彼	返	右大臣	間	三月	召	訪	春宮	滝	
			六	四	五	六	〇	三	〇	七	七	六	七	六	一〇	古今
			三	四	四	九	一五	一一	五	八	八	七	八	三	四	後撰
			七	八	七	一	一	二	一一	一	二	四	二	八	三	拾遺
			一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一七	一七	一七	一七	一七	合計